網走南ケ丘高校新聞

発行所
網走南ケ丘高校
新聞局
発行責任者
我妻孝介

特集・自習室

存在意義を考える

1、2年次生の利用は

本校1階職員室の向かい側にある自習室。普段は受験勉強など、進路活動のために利用している3年次生が多く見られるが、最近では期末考査前の勉強に利用した生徒もいるだろう。

しかし、自習室の存在自体は知っていても実際に使用したことはない、という生徒もまた多い。特に、1・2年次生の利用は低迷している。そこで今回は自習室がどういったところなのか、またどのようなタイミングで使えばいいのかなどを提案する。

自習室とは

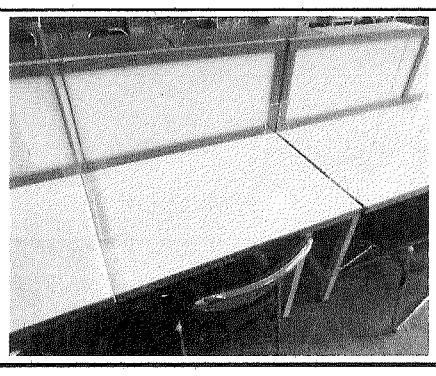
自習室とは、本校の1階職員室前にある教室であり、食事、勉強に関係のない私語は基本厳禁。完全に勉強に特化した場所である。自習室には各大学の赤本やパンフレットが設置されているほか、それらの資料をコピーすることもできる。自習室を利用する際には黒板に貼ってある名簿に名前を書いてから、というのがルールだ。

自習室の問題点

現在抱える自習室の問題の1つは「1、2年次生の利用率の低さ」だろう。後述するが、自習室の利点を調査するためアンケートを行ったところ、その回答者はすべて3年次生だった。最近の自習室の様子を見ても、利用者の多くを3年次生が占めている状況だ。しかし、受験は時間が命。時間の有効利用や学習習慣の定着といったことを考えると、1、2年次生にも自習室を利用する意義は十分にあると考えられる。

3年次生の割合

自習室の生徒層を知るため、利用者を対象にアンケートを実施したところ、集計結果はアンケートに答えてくれた生徒10人中10人が3年次生という結果になった。この割合は受験が近い3年次生の焦りから来るものなのかと局員は予想したが、「自習室を使い始めたきっかけは何か」という質問に対しては「テストが危ないから」といった回答が多かった。このアンケートを実施したのが定期テスト前ということもあるだろう。考査期間ではないときにアンケートを実施すればまた違った結果が得られるかもしれない。しかしながらやはり自習室を利用している生徒の割合は3年次生が多い。



▼机…一つ一つが大きく、沢山の教科書、参考書を並べながら勉強することができる。

生が多いと改めて感じる。

この傾向ゆえ、自習室の利用にためらいを感じる1、2年次生も多くいることだろう。また、「自習室＝受験勉強」というイメージも根強く、早くから自習室を利用することに意義を感じない人もいるのではないだろうか。そんな固定観念を払拭すべく、報道局は「自習室の存在意義」を考察した。

自習室の存在意義

南高生の中には家に帰って自分の部屋で勉強した方が集中できるという生徒も多いだろう。しかし、家には勉強の妨げとなるような誘惑が多い。一方で、自習室は先述した通りそういったものがない。

自習室は、家に帰るとどうしても誘惑に負け、だらけてしまう人が勉強をするのにうってつけな空間なのである。

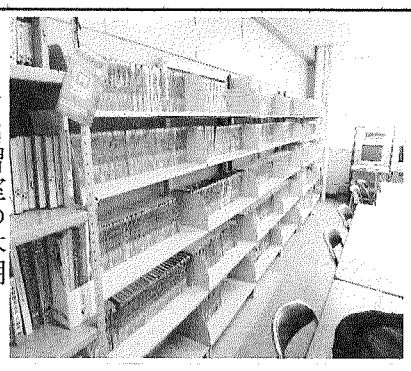
また、市外に住んでいるという人は，バスや汽車まで時間がある、というときに自習室を活用するのもおすすめだ。特に1、2年次生は今のうちから勉強の習慣をつけるためにも、利用を強く勧めたい。

そもそも自習室は何のために存在するのか。「勉強に集中するため」だと局員は考えている。あくまで自習室は勉強のための「手段」であり、自習室に入ることが目的になってはいけない。このことを念頭に置いて自習室を使用することが大切だ。

局員レポート

「家より集中」使って実感

自習室は涼しく、照明も十分に確保されていた。また、市内から登校する生徒が多く自習室を利用していた。市外からの生徒の利用が多いと思っていたため、この点には驚かされた。



▶自習室の本棚

自習室の後方には各大学の赤本、参考書などがびっしりと並んでおり、南高生の進学先のほとんどすべてが網羅されている。職員室が向かいにあることや、廊下から中の景色が見えることなど、自宅と比較してかなり集中できる空間だ。また、自習室の立地には勉強をする上でわからない部分があればすぐに先生に聞きに行けるという利点もある。

今後も自習室を利用したいと強く感じた。

開校100周年記念
報道局特別連載企画

南高 あの先輩に学ぶ

第3回① 金メダルの出発点は「好奇心」

意外な高校生活語る

「南高 あの先輩に学ぶ」。第3回は南高を卒業後、チェアスキーヤー選手として活動。バンクーバーパラリンピック、ソチパラリンピックで金メダルを獲得し、先日、日本代表としての活動を終えることを発表した狩野亮さんに話を伺った。

狩野亮さん（チェアスキー選手）

当時の学校生活について伺うと、狩野さんは「正直、ひどい学生生活だった」と苦笑い。「放課後も友人と集まって遊ぶことが多かった。アスリートらしい、優等生のような学校生活ではなかった」と、意外な過去を語る。

記憶に残っている行事は「南高祭」だという。「車いすではあるものの、山車で街を練り歩いた、市内の公園でのパフォーマンスでは主役的な立ち位置に立たせてもらった」と思い出を振り返った。

高校時代は陸上部に所属していたというが、トラックの改修工事や先述したような学校生活から、顔を出すことは数回しかなかったという。

その一方、冬はスキー場に行ったり、夜は車いすで走るなど、当時からスキーに対する情熱はあったそうだ。

小学校3年生の時、交通事故で車いすの生活となった狩野さん。しかし、「スポーツがしたい」という熱意は変わらなかったという。その後、狩野さんは両親の思いもあってまずはアーチェリーを始める。そのアーチェリーの先生に薦められたのがチェアスキーだった。「（スキーは）怪我する前から続けていた。挑戦してみたくなった」という好奇心が、雪上への復帰のきっかけだった。

そして1988年。長野県で開催された冬季パラリンピックの映像を見たことで、狩野さんは本格手的にチェアスキー競技の道へ進んでいく。